

<講座報告>

D 「自閉症の子どもの実態把握と検査資料の理解について～支援は子どもをみつめることから～」 **東住吉支援学校 富田 淳先生**

1. 自閉症の子どもの実態把握について

まずはじめに先生は、「まずはじっと子どもを見つめることから。そして、好きなこと・できることを見つけることが、支援の入り口。」ということをお話しされました。その上で自閉スペクトラム症の定義や自閉症の特徴である、あることへの頑ななこだわりや、感覚刺激に対する過敏さ・鈍感さ、変化を好まず反復的な行動をすること、そして人との距離感が分からない友達づくりや対人関係の苦手さなど、さまざまな事例を挙げて説明していただきました。私たちも自分の関わっている子どもたちを思い浮かべながら聞かせていただきました。そして、子どもを見つめること（行動観察）を複数の教師で行うこと、一人ひとりの実態に合わせ根気強くトレーニングしていること、また対人関係トラブルの予防と対応の仕方についてサポートしていることを話されました。あらためて、あたたかく子どもを受け止めてじっくりと向き合うこと、褒めて育てることの大切さを考えることができました。

2. 検査結果の理解について

検査については、S-M 社会性能力検査、ASA 旭出式社会適応スキル検査、新版k式発達検査、絵画語彙発達検査、フロスティック視知覚発達検査などたくさんの種類と特徴があることをお話いただきました。WISK-IVについては、全検査 IQ・言語理解指標（VIC）・知覚推理指標（PRI）・ワーキングメモリー指標（WMI）・処理速度指標（PSI）の5つ合成得点の結果をもとに子どもの困っていることを明らかにし、どんな支援を必要としているかの理解を深める手立てになることを、例を挙げながらお話いただきました。

これらの検査について知り、理解を深め具体的に毎日の支援にどう結びつけるのかを深く考える学びができました。



最後に、受講者全員で「むすんでひらいて」（振り付き）の「て」だけ発音せず歌いきる体験にチャレンジしました。普段、「簡単！」と思えることが、ある条件が付くことでどれだけ難しく感じるものなのかということがよくわかりました。次に、歌詞の表示があり、更に「て」だけ色付けられた視覚支援があると、間違える人も最初に比べるとずいぶん減り、みんな大きな声で自信を持って歌えるようになったことを体感できました。

困っている子どもの気持ちを理解し、みんなであたたかく見守り育てていくことを教えていただきました。